

「ツバメのこと、許すわ」

テーブルに置かれた紅茶の湯気が、ふわりと揺れた。  
ルルは今、なんて言った——？  
反射的にうつむいていた顔をあげる。  
冬の空のような青が、こちらを見ていた。

「万能薬が、必要なんでしょう？」

<sup>こはく</sup>琥珀色のきれいな瞳が見開かれる。  
席を立ちながら、ポケットの中にある鍵に指をかけた。

「ただ渡すわけじゃないわ。私も一緒に、ツバメの家に行く」  
「え……？」  
「待っていて」

そう言葉を残してキッチンを出ていく彼女を、見ていることしかできなかった。

そして、ひとりになった俺は、ルルの言葉を反芻<sup>はんすう</sup>する。

『一緒に行くわ』と。  
大事な薬だってことは、もう知っている。  
俺が本当に薬を使うのかって、疑われているのかもしれない。  
そう思われても仕方ない、だから、それでもいいと思った。

調薬室の扉を開いて、薬を取り出した。  
これが、最後のひとつ。  
誰に使うのか見極める。  
亡き父との約束——私は今、選択をした。  
そして、見届けるために、彼とともに行く。  
これでいいと、思った。



「おまたせ」

その手には、求めていたものが握られている。  
薬を前にして動けない俺に、ルルは言った。

「早いほうがいいわ。行きましょう」

「……でも、いいの？ 今日診察日だよ」

「あら、これも診察の一環よ」

そうって笑うルルは、どこまでも薬師<sup>くすり</sup>だった。